

## 描画法「坂道と私」の臨床的妥当性についての研究

——大学生の抑うつ感情に対し認知日誌を用いて——

A53096 澤田圭美

ストレス防衛をみることを目的とした描画法として、Hammer,E.F (1958) によって紹介された「雨中人物画」があり、日本では「雨の中の私」として定着している。丹治ら(1993)は、「雨の中の私」においてストレスを表す「雨」を「坂道」に置き換えた課題画「坂道と私」との比較を通して、個人のストレスとその対応をみる場合は「雨の中の私」より「坂道と私」の方が有用性が高いことを証明している。

### 【目的】

本研究ではストレスを丹治らの研究に比べよりせまく定義し、人間のストレスの一種である「抑うつ感情」に焦点をあて、描画法「坂道と私」の臨床的妥当性について検討する。仮説 描画法「坂道と私」は抑うつ度と関連がある。

- 1、抑うつ度の高さに即した共通の表現が「坂道と私」に表れる。
- 2、抑うつ度が増加もしくは低下することによって、その変化を表わす共通した表現が「坂道と私」に表れる。

### 【方法】

予備調査によって抑うつ度の高い実験群2グループ(H1・H2)と抑うつ度の低い統制群1グループ(L)を選定する。まず、実験群・統制群ともに初回面接にて「坂道と私」テストを行い、その後、抑うつ度の高い実験群は、H1とH2で期間をずらして3週間の認知日誌を行う。その間、抑うつ度の低い統制群は、3週間のインターバルを2回繰り返す。最終面接にて、再び全員に「坂道と私」テストを行う。

### 【結果】

抑うつ度変化と人物の大きさの変化、抑うつ度変化と坂道の付属物の種類数の変化において相関が見られ、事例でも変化を確認することができた。しかし、抑うつ度得点自体と「坂道と私」テストに相関は見られなかった。

### 【考察】

抑うつ度変化と相関の見られた項目があったことから、描画法「坂道と私」は抑うつ感情と関連があると言える。抑うつ度が減少することで、安心感などの心理的余裕や心的エネルギーが高まり、人物を大きく描く、坂道の付属物の種類を増やすといった表現が表れたと考えられる。しかし、抑うつ度得点自体との相関は見られなかったことから、「坂道と私」の信頼性や妥当性の向上のためには、今後更に他の心理検査等を用いて検討していく必要がある。

抑うつ度変化・人物の大きさ変化・坂道の付属物の種類数変化の相関

	抑うつ度変化	人物の大きさ変化	付属物の種類数変化
抑うつ度変化		-0.51 *	-0.54 *
人物の大きさ変化			0.27
付属物の種類数変化			

\*:p<0.05